座標

仏の独立系書店

顧客と本 出合いつなぐ

宮城学院女子大准教授
間瀬　幸江
（仙台市）

フランスは書籍文化の国だ。新刊本を扱う小売店は国内に約３０００店あるという。地方都市でふと時間が空いた時、ぶらぶらと散策をすることがあるが、個人経営の新刊本取り扱い書店に行き当たるとうれしい。文学、美術、デザイン、哲学、エッセー、画集など、作者の顔の見える人文系・アート系の本を取りそろえている店が多い。クリック一つで本が届く大型ネット書店とは一線を画する、独自の選書が売りである。

こうした書店の多くが、二つの「つながり」を大切にしている。一つ目は、店と地元住民とのつながりだ。本好きは、特に買いたい本などなくても、仕事や学校帰りにふらりと店舗に顔を出す。店員と世間話をしたり、お薦めの新刊本を手に取ったりしている。深夜などの営業時間外でも、お薦め本が照らされたウインドーを眺めるのは楽しい。

選書は定期的に入れ替えられ、飽きさせない。かくして夏はバカンス中に読みたい数冊を探しに、冬はクリスマスプレゼントを選びに、人々は書店に赴く。

気に入った本に出合い一人読むことで、日常から離れ心をリセットできる。この感覚は、かかりつけ医に診てもらったり、いつも行く薬局で薬をもらう感覚にも、お気に入りの雑貨屋や花屋、あるいは喫茶店や公園のベンチに立ち寄る感覚にも似ている。本は心の栄養であって、生活・命の基盤を支える必需品なのだ。この共通理解があればこそ、新型コロナウイルス禍のロックダウン（都市封鎖）時、フランスの書店業界と読者はマスメディアと連係して国に陳情し、本とCD・DVDの店頭販売を、食品や燃料と同列とすることを認めさせることができた。

二つ目は、本の作り手と読者のつながりだ。例えば、新刊本の著者のトークイベントが店内で開催される。私のお気に入りのリヨンの書店Ｒｉｖｅ　Ｇａｕｃｈｅ（リヴ・ゴーシュ）は、平積み棚の多くが可動式なので、店内をイベントスペースに模様替えできる。店員は、良い書き手、編集者と連携して、選書に自分の思いを乗せる。店員は単なる在庫管理のレジ係ではなく、顧客と本の出合いをサポートする水先案内人なのだ。

店内でふと目についた本を手に取り、小さな心の高揚とともにレジに赴きお金を払うとき、店員がその本についての個人的な感想をぽろりと口に出す、一瞬の心の触れ合いが好きだ。「私もこの本に勇気づけられました」「よい読書になりますよう」。そして、顧客が店先でじっくり考えることを喜んでくれる。「私たちもあれこれ考えながら選書しています。ゆっくり選んでくださってうれしい」

店員とのこうしたやりとりで、顧客や読者もまた、書籍文化を担う当事者のコミュニティーに緩やかにつながっていく。「積ん読」を増やしてしまうと知りつつも、いつかは読み終わり、次の本を買いに行く時に、感想をあの店員さんに話そうかな。つながる思いが、顧客の心をふわりと押し上げる。昨今のフランスの独立系書店の顧客でいることの醍醐味（だいごみ）である。